

裸一貫仕事にあたり

郷土や社会に貢献した人

略

歴

明治四十一年三月二十五日

徳之島町亀津南原はいばるで生まれる。

大正九年三月

尾母尋常小学校卒業する。

昭和九年四月

前田溶接工業所を創立する。

昭和二十五年七月

関西金属工業株式会社設立する。

昭和三十二年十月

徳之島町亀津の高千穂神社の造営、再興に奉獻する。

昭和三十六年十月

徳之島町亀津に公民館を寄贈する。

昭和四十三年一月

鹿児島県立徳之島高等学校に図書館を寄贈する。

昭和五十六年三月二十日

徳之島町より名誉町民の称号を受与する。

昭和五十九年一月七日

七十六歳で永眠する。



前田村清

まえだむら

きよ

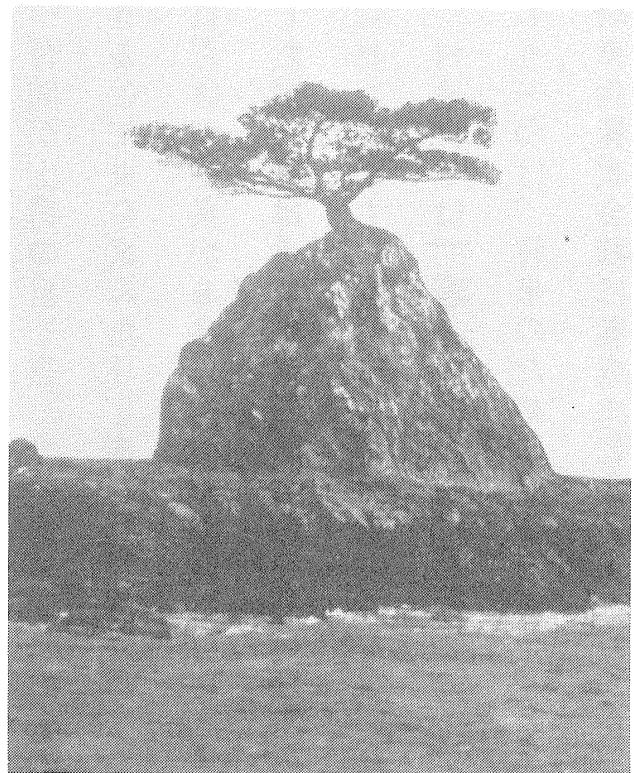
生いたち

前田村清は明治四十一年（一九〇八年）三月二十五日父前清、母ましかなの二男として、徳之島亀津南原で生まれました。当時南原の子どもたちは尾母小学校に通っていましたので村清少年も尾母小学校を卒業しました。同級生には、会社を経営するようになつてからも相談役として共にしてきた及川永保がいました。

兄弟は七人で農業だけで生活をしており、当時の食生活といえば朝は、おつゆといも、昼はおかゆかぞうすい、夜はヤンキチシキバン（カヤぶきの、タル木が写るような、うすい水のようなおかゆ）で、白い米のごはんは、正月やお盆など祭り事がある時しか食べることは出来ませんでした。村清は、小学生のころから家業を助け、牛をつないだり、草刈りしたり、よく手伝いをしました。大正十一年十五歳のころ亀津南区に移りました。

汽笛一声、神戸に出る

五月ともなれば大島ではすでに盛夏の暑さで、たそがれどきから吹く軟かい風に初夏を味わ



村清の見つめた岩頭の老松

う位です。大正十三年のある日の夕刻、ひと時の憩を求めて、一人の少年が鎮守の森（高千穂神社）に登ってきました。彼は断崖の上に立つて太平洋の水平線に目を向けたまま、何時までも立ち去る気配もありません。

顔の向きをかえたと思うと、少年は腕を組んで「古い松」の枝ぶりを見つめています。

それは、あたかも春夏秋冬の恵みを平等に受けて、生きることを楽しみ、今日を喜んでいるかのようで、松の緑に何か求めているように見えました。しばらくすると少年は、決するものがあつたと見えて、胸を張つて手でパンと胸をたたきました。少年は風雪に耐えた、「岩頭の老松」のように生きていきたい。と小さな胸に希望を抱き、よし、神戸に行こうと、決心したのです。この少年こそ村清少年だつたのです。

父母のひざ元で生きることは貧しいながらも、何の心配もなく、気楽ではあるが、それは風の当らない中庭の盆栽に同じです。岩頭の古い松のようになるためには、大都会に出て激しい生存競争の荒波の中に飛び込むことだ。そして母の温かい、ふところから裸一貫で去る決意をしたのでした。そして帰りがけに再び氏神に詣でて、「私を守つて下さい。私は故郷に錦を飾

るまでは、決してこの懐かしい龜津の地は踏みません。」と願いをかけました。

村清少年は胸いっぱいの希望を抱いて神戸に行きました。「何といっても将来は自立だ！身に職をつけて存分に働く。そして目標に向かっていこう。自営の道は険しいが、これに駒を進めることがだ。」と決意を固めることでした。

染めものの工場で親方の家庭生活を見、そして川崎車両では社長やほかの上司の言動を見たり聞いたりもしました。うらやましいことばかりでしたが、それがかえって参考となりました。「見ていろ、今に僕もあるようになるんだ。」と、自分に言い聞かせて溶接の遮光面（火の粉や強い光が目や顔に当たらないように防ぐ道具）を左手に握りしめるのでした。

仲間が上司の目を盗んで遊んでいる時でも村清は一生けんめいに働いて、効率を上げ、さまざまな工夫を試みたりしました。自分の技を練り腕を磨こうとするいろいろな試みはやはりそれだけの効果があり、技術の上達は目に見え、仕事の能率の上にもハッキリとあらわれてきました。仕事は人に負けたことがなく、仕事の量が多くその質が良いということで上司から褒められたことも一度や二度ではありません。

村清少年は、二人前働くねばなりませんでした。一つは毎日の仕事で、技術の修得であり、もう一つは、将来のために資金を蓄えるためのものです。だから町工場で働いていた時も、川崎車両株式会社に養成工として入社した後も、会社の仕事を終えた後で別の仕事をして、いく

らかの資金を稼ぎました。そして、むだ使いをせず蓄えていきました。

一步も引かない強い気迫

仲間の若者たちは一日の仕事が終わると、さつさと家に帰つて湯にひたつて汗を流し、ゆかたでくつろぐ者もあれば喫茶店などで遊ぶ者もいました。七、八月の盛夏のころなら誰もが願うことでしょう。それでも村清は、うらやましいとは思いませんでした。村清には第二の勤めが待つていてからです。それを果すべき責任があります。天びん棒でアイスクリームをかついで売り歩くことです。疲れた体にはアイスクリームは重いものでした。妙法寺川尻から須磨浦にかけての海岸が稼ぎ場だから、雨が降らない限り毎日これを繰返しました。時には、あざ笑うようなまなざしで見られたこともあります。しかし、村清は、腹の中では見てる、「今にこつちが笑つてやるから」と自分に言い聞かせ、歯をくいしばつてがんばりました。

冬は身を切るような木枯らしに吹かれながら寒い夜中まで、アルバイトをしました。

ある時、街角で屋台車の店を開いて関東煮を売りに行つたときのことです。吹きさらしの夜空は深々と更けて行き人気も少なくなつたころに若者が二、三人ドヤドヤと入つて来て、あれだこれだと注文をし、腹いっぱい食べたあげく、

「おい兄ちゃんまた来るぜ。」と言い残して立ち去ろうとするではありませんか。

「お代はまだですか？」

「何をつ！ だからまた来るつんだヨー。」

「代金をちゃんと払ってください。」と、一步も退かずに立ち向ったので、その若者たちは村清のけんまくに、たいへんびっくりして、先の元気は全くなくなりました。その中の一人が「実は仕事がなく金もなく腹がすいての出来心だ！ 勘弁してくれ」と、手を合わせて拝むようになりました。その哀れな姿を見て、かわいそうになり許してやりました。その後姿を見送りながら若者が何というぶざまなことだと思い、またファイトを燃やしました。

父の死と独立

昭和六年五月のこと「父ヤマイキトク」と電報がきました。軽い病気をしているということは聞いていたけれども、まさか死ぬほどの病気とは思わなかつたので、大変驚き、取るものも取らずに急いで帰着しました。父は息を引き取るとき「自分の世は終わりだ、お前の人生はこれからだ、いつまでも泣き悔むことなく、早く神戸に行つて仕事に励め。そして将来立派な人になるんだよ。」とやせ細った手を差しのべてくれました。野辺の送りをすませて七日目に会社

から電報がきました。溶接技術試験の知らせです。“立派な人になるんだよ”という父の遺言を胸に、亡くなつた父のために、また母への孝行のためにもと思い、後髪を引かれる思いで故郷をたちました。従来は、ただの経験だけで選考されていた溶接が試験によつて選考されるようになつた第一回の溶接技術試験に見事合格しました。その喜びは、父の死の悲しみと共に生涯忘れられない出来事でした。この時、父は四十七歳の若さでした。四十六歳で働き盛りの母は、五人の幼な子を前にして、これから子育てが大変だと思いました。

そこで、村清はこれを機会に念願の自営に踏み切ろうと、周囲の人の止めるのを振り切つて川崎車両を退職し、フリーの立場で、あの職場、この会社と一人で請負いの仕事を始めました。運よく仕事は沢山手に入り、順調に進んでいきました。

関西金属工業株式会社設立

昭和六年一人で請負いの仕事をして、自営の方向への見通しがついてきました。ここで借家の表玄関に「前田溶接工業所」の看板を掲げ、数人の工員を集め工場を発足させました。そして工場では四、五人の職人が注文を受けた仕事をやり、一方では得意先の会社に社員を派遣して現場での仕事をさせました。忙しくもなつたが利益もよくなりました。自分の工場で注文を

受けて仕事をした方が有利であることもわかりました。

会社のモットーには

- (一) 納期を厳守しよう。
- (二) よい製品を安く作る。
- (三) ごまかしをしない。

この三か条をかかげて毎日の仕事に社員と共に熱を入れました。

職人の意地というかまたは自信と言うのか、良心的に見積った単価の値引きは絶対しない。

その仕事の受注が不成功になつても、この精神で終始とおしました。

太平洋戦争が始まつた昭和十六年ごろから軍事産業がますます忙しくなり本格的な工場が必要となり、現在本社のある西淀川区竹島町に土地を求め、新しく工場を建設して「淀川溶接株式会社」の名称で輝かしい第一歩を踏み出しました。ところが戦争が終わつてからは以前とは全く事情が変わり、熔接の事情だけでなく製缶や板金作業にも手を伸ばさなければならなくなりました。それで会社の商号も「淀川金属工業株式会社」と改称しました。(従業員約七十名)

その後、会社も大きくなり、昭和二十五年七月現在の「関西金属工業株式会社」となりました。更に昭和二十八年に第二工場(静岡工場)ができ、昭和三十一年五月には第三工場(名古屋工場)ができるというめざましい発展を遂げました。従業員も全工場を合わせると約四五〇

名にもふくれ上がりました。

復帰運動

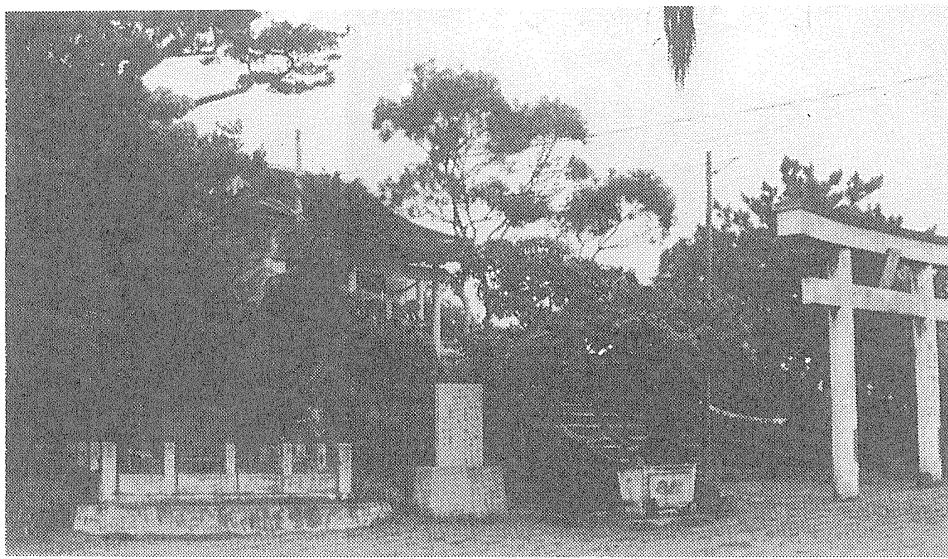


郷土の祖国復帰を喜ぶ前田村清(中央)

郷土の祖国復帰は四十万奄美群島民の切実な願いでした。老若男女を問わず全群島民が死にもの狂いで復帰運動をしました。東京や大阪でも奄美出身者が必死になつて運動をしましたが、大阪では前田村清も復帰運動のリーダーとして活躍しました。

前田村清は、四十万奄美群島民の祖国復帰の切実な願いをかなえるために、大阪在住の奄美群島出身者によりかけ、物心両面にわたつてその先頭に立つて運動しました。

故郷への貢献



前田村清によって建造された高千穂神社

「雨やんで、人、傘を忘れる。とかく人間は、時の流れに、過去を忘れがちである。」かつてあるテレビで放映された時の言葉であるが、前田村清は親のこと故郷のことを見失わず、時を経ても心の中に残すことを心がけていた。故郷への貢献も忘れませんでした。

復帰の翌年、昭和二十九年一月、島に帰り敬神の念の厚い村清は、高千穂神社の荒れ果てた姿を見て、深い悲しみを感じた。先ず島の復興は精神生活の中心となる敬神の心を養うべきだと思い、手初めに鳥居を建設し寄贈しました。

昭和三十年六月、六月燈^{どう}のころでした。その後は神社再建三か年計画を立て、昭和三十三十月に社殿を造営し、更に昭和三十三年十月に拝殿前の奥の鳥居を建造し、昭和三十四年六月には社務所（麥穂殿）まで次々と建造し寄贈しました。

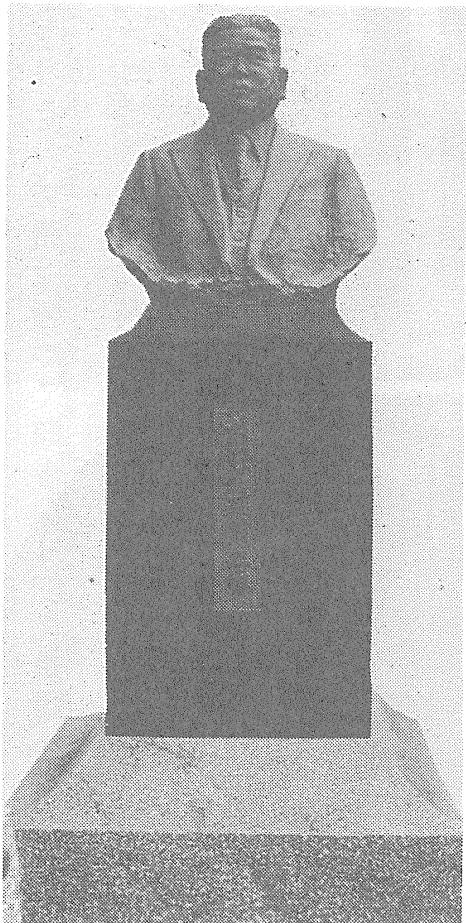
このように私財を投じて、次から次へと麦之穂高千穂神社を造営したことに対し徳之島町民たちから深く感謝され頌徳碑しょうとくひが神社境内けいだいに建てられました。

寿像建立じゅぞうけんりゆう

徳之島高校の校庭入口に奥山八郎先生と並んで、前田村清翁の寿像じゅぞうが立っています。徳之島高校の運動場、図書館の建造にも多大の寄付をされたからです。

前田村清翁之像（碑文）

前田村清翁は明治四十一年三月、前清、ましかなの二男として徳之島亀津に生れ、大正十三



県立徳之島高校正門横の胸像

年、十六歳にして故郷を離れて川崎車両株式会社に職を奉じ、熔接技術の研鑽に励み功を成す。昭和九年自営の道を選ぶや社会公共への謝恩を志として公民館の建設から各氏神の神殿を寄進す。

更に郷土の振興発展に尽しどくに

日本国史と共に国際史につながる奄美群祖國復帰の民族運動では先頭に立つて物心両面の活躍をされその功績は極めて顯著なり、又農道の新設整備農場の開発をはじめ教育の振興には県立徳之島高等学校に前田図書館を寄贈するなどその例は多い。

又農村娯楽の闘牛を指導育成して観光資源たらしめ畜産業の指導奨励の上にも多大の成果を挙げた。



横綱になつた関西金属 1号

これらの功績に日本赤十字社は金色有功章の下賜あり

内閣総理大臣より紺受褒章又鹿児島太陽国体で褒賞が贈られた事績等を永く後進に語り伝えんと寿像を建立する。

昭和五十六年三月二十五日

前田村清翁顕彰会

と、刻まれています。碑文にもあるとおり、昭和三十六年十月に、亀津南区に公民館を建設し寄贈され、現在まで南区集落の発展にも大きな役割を果しています。

闘牛

前田村清の最大の趣味は闘牛です。子供のころから闘牛をかわいがることは格別で、自分は食べなくても牛には食べさせるというぐらいでした。ある時には、おかゆを自分が食べているふりをして、バケツに入れ牛にやつていたこともあったそうです。社長になつてからも徳之島の産業振興の一環として亀津闘牛場を建設し、自分も数頭の闘牛をもつていました。その中でも関西金属一号は横綱になりました。

自分のこと

前田村清は、自分の生き方について南日本新聞に次のように述べています。

『信条を持ちたい。むつかしい語句だが、自分の処世上の指針的な考え方である。私は「忘れないで」を第一に考え「努力は運を拓く」と思い、義理は欠きたくないもの、情は深く持つたいもの、そして恥はかきたくない、慎しみたいものと思う。

幼いころ、母にいだかれてひざに乗せられた思い出は今も目に浮ぶ。だれもが体験すること

である。神戸に出て仕事にありついた喜び、食べるのに精いっぱい苦しかったこと、下宿部屋でのザコ寝も今となれば結構たのしい話題の種だ。これを振り返ることは反省のもとにもなり奮起の糧となる。

子がよくなれば親は最大によろこぶ。これが孝行というものだ。産んでいただき、いくみ育ててくれた親に報いるただ一つの道である。だから私は流行歌の文句じやないが「忘れないで」を第一の信条としている。

くにを出る時、故郷に錦を飾ると考えないものはいるまい。それには先ず働くことだ。そして不動の目標を立てるべきだ。また働くことも平凡では駄目だ。それは万人のものであるからだ。時間的に人より多く、上司の目が届かなくても仕事を愛する心で働くこと、拙速せつそくより巧遲こうちを勧める。簡単に言えば努力することである。運がよい悪いと言ふことも聞くが、努力することによって運は自ら拓けると信じたい。第二の信条としたわけである。

人様に顔を合わせまたは接触するだけでも、知らぬふりでは動物とかわらない。まして、日頃お世話になつた人やまたは知り合いの人には報いることを忘れてはならない。それは物質的なものを指す訳でなく、ほほえみの表情だけで足りることです。

恥は旅のかきすて、と言うことばがあるが、いやな言葉だ。天知る・地知る・人知る・われ知るの諺ことわざをかみしめてほしいと常に考えている。人が見ていても知らなくても、普通の常

識に反しない行ないをしたいものである。これでなければ“恥をかく”もどとなろう。教訓や説教のつもりで押しつけるつもりはないが、世を渡る上に遠い灯台のかすかな灯と取つていたければ幸いである。』（昭和三十八年十一月十日 南日本新聞）

このように、常に意欲的で計画的に実践し、郷土のために尽くした前田村清の功績をたたえその遺徳をしのびたいと思ひます。

執筆者 作山清重